



佐藤静一先生の死去に接し『送る言葉』

夜のしじまを裂いて電話が鳴る……。

「岡井サンのお宅ですか。サトウです。この間は珍しいもの送って頂いてありがとうございました。タロー君、ジロー君は元気かな？　ところで、ちょっと相談にのってもらいたいんじゃないですか……」　簡潔な文で一語一語をゆつくりと正確に話される濃厚な声、今にも電話が掛かってきそうな気がする。

私は生涯「独立独歩」を信条としており、師も弟子も持たぬことにしているが、それでも忘れられない恩師を三人持った。九大の故松浦新之助先生、泉屋先生そして佐藤静一先生である。

松浦先生には細かいデータにとらわれない「自然科学者」としての見識を、泉屋先生には「ペプチド」合成の魅力を教えられた。そして佐藤先生には研究者としての在り方を知らず知らずのうちに教え込まれて、今日では私の血となり肉となつていように思える。

元来　先生は、デンブンの化学における先達の一人であった。研究生生活を送る大切な時期に、第二次大戦とその戦後処理の時代に遇われた。晩年は、工学部長、米子高専校長、広島女子大学長、広島電機大学長と歴任されたが、思うに先生は、本当は化学研究者として一生を歩まれたかったのではなからうか。それ故にこそ、学長として後輩の便宜を献身的にはかられたように思う。私もささやかながら研究一筋の生活を続けていられるのも、先生の教訓あればこそと考えている。蛋白質に加え糖化学に関心を持つのも、先生のただ一人の後継者でありたい、との念願によるものである。

先生と奥さんの仲睦まじさは、つとに高名である。特に晩年二人寄り添い助け合つて生きてこられたこと、人生の辛酸を経験された後だけに、よりひしひしとその貴重さが理解されるのである。私ども夫婦もかくありたいと日頃から銘じている次第である。

お葬式の帰り、クルマの中で家内がふとつぶやいた。「いかにも佐藤先生らしいワ。亡くなるときも土、日曜の休みの日を選ばれたのだから。よく気の付く方だった……」

天寿を全うされ、亡くなる前夜まで好きなお酒を呑まれたようだから、いま先生を失っても悲しくない。唯だ、唯だ、無限に寂しい限りである……。

—合掌—

工学部発酵工学講座　岡井秀雄（おかい・ひでお）



梅垣嘉治名誉教授を悼む

本学名誉教授梅垣嘉治先生は平成五年十月十八日、八十四歳の生涯を閉じられた。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和九年京都帝国大学理学部を卒業後、京都大学講師、広島高等師範学校教授を経て、昭和二十五年広島大学教授となり、昭和四十四年七月から昭和四十八年三月に停年退官されるまでは広島大学理学部長を併任された。

先生の御専門は鉱物学で、電気的性質など鉱物の物性を中心に研究された。終戦直後の困難な状況下で、各種の実験装置を学生とともに夜遅くまで工夫されるのが常であった。

先生の御研究は鉱物学の狭い分野に限らず、応用的な分野でも多くの成果をあげておられる。特に、瀬戸内海沿岸の花こう岩地帯での深層風化の現象に深い関心をしめされ、この地域での集中豪雨による崖崩れ、土石流等の鉱物学のおよび土質力学的観点からの調査とその災害復旧対策の研究、また、中国地方各地の地下水や温泉に関する研究も数多い。

先生が理学部長を勤められた昭和四十年代の後半は大学紛争直後で、先生は紛争後の秩序の回復と、広島大学キャンパス用地調査委員会委員長をはじめとする各種の委員として広島大学の改革構想、それに基づく東広島市への統合移転計画の基石を敷かれた。

先生はこよなくお酒を愛されたが、それは、研究・教育の潤滑油として、また同時に大学紛争時代には、先生のお人柄とあいまってギスギスした人間関係の摩擦の解消に大きな役割を果している。

先生の御冥福を心からお祈りする。

理学部地球惑星物質学講座

竹野節夫（たけの・せつお）